

西洋畫の成績(下)

美術審査委員 黒田 清輝

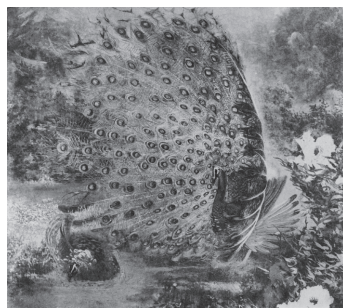
▲孔雀(土岐芳助)は普通の作品とはやゝ異つた趣がある、十分に行渡つた作と云ふ譯には行くまいが、正直に細かく描いてある、そして本來厚みのある油繪を故意に平つたく日本繪のやうに描いた所に、新しい努力が見える、平つたい方面に向つて筆を進め、裝飾的の研究を試みた所が全く此畫の價値であると思ふ

▲厨さき(香田勝太)は、厨さきの見苦しい所のものを題材にし、之を美化して畫中のものとしたのは珍しい、作者は色の排合でも面白く感じて筆を執るに至つたのでも有らう乎題材とすべきものは何處にもある、どんな汚ないものでも巧みに美化するのが藝術家の仕事であると云ふ主意で描たのではあるまい乎成る程世人の眼を背ける様なものでも、其人の見様考様によつては、立派な題材に成る、「厨さき」は此點を示すのに最も適当な作品である

▲先づ是等の畫は今度の出品中で大分様子の變つたものだ只變つて居ると云ふだけでは勿論何の役にも立たないが眞面目な研究の跡が見えるので特に擧



香田勝太《厨さき》東京藝術大学大学美術館蔵



土岐芳助《孔雀》

げて見たのである

▲今の時代では未だ主に描法を研究するのが肝要ではあるが面白いと感じたなら何でも描いて見るがいゝ世の獎勵家も成る可く心を廣くして筆者の心持を察して心からの仕事がしてあると認められる點があれば見捨ないやうにして貰たい何しろ今の調子で進めば遠からず立派な作品が澤山現はれる時が来るであらうと思ふ

『東京毎日新聞』明治四三年二月五日

第四回文展(明治四三年一〇月一四日〜二月三日)をふまえての所感。香田勝太(二八八五〜一九四六年)は東京美術学校で黒田や和田英作に学び、明治四三年三月に卒業。同期生に藤田嗣治、近藤浩一路、岡本一平らがいた。本文献中の《厨さき》は卒業の年に《秋草》とともに文展へ出品し、初入選を果たした作である。その後も文展・帝展を中心に出品を続け、穩健な官展系作家として知られるようになった。香田勝太については、目黒区美術館『美術史探索学入門「美術館時代が掘り起こした作家達」展』図録(昭和六三年二月)を参照。